

初めて学ぶ「浄土真宗の聖典」講座シリーズの意義

はじめに

宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌法要
は、この四月から来年の一月まで、六十
五日間、百十五座にわたって、本願寺の
御影堂で行われています。この法要は、
五十年毎に行われる聖人の年忌法要で、
今年がちょうどその節目にあたります。
私たちが一人ひとり、親鸞聖人のご遺徳
を偲しのび、そのお徳を讃たたえるところにも、浄
土真宗の教えを深く味わう機縁となるも
のです。

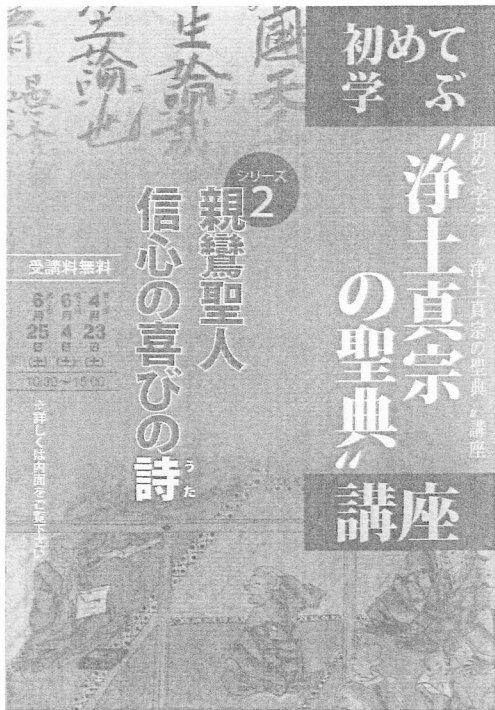
そして、この法要をお迎えするにあた
り、これまでに編纂されている各種の聖
典について、もつと身近に味わっていた
だきたいという思いから、聖典の公開講
座を開くことになりました。これは、受
講者の皆さんとご一緒に、各種の聖典の
扱い方や使い方から始め、聖典を通して、
親鸞聖人の教えや、そのご生涯を学んで、
浄土真宗の教えに触れていただくといい
ことを目的として企画したものです。

熱心な受講者の姿

昨年の秋からスタートした「初めて学
ぶへ浄土真宗の聖典」講座シリーズ」で
すが、すでに通算で五回の講座を無事に
終えることができました。今でも公開講
座の告知から、一週間も経たないうちに、
予定する参加者数を大幅に超え、キャン
セル待ちが出るほどの申し込みがありま
す。

多くの方々が、親鸞聖人のお膝元ひざもとであ
る本願寺で、真実の教えを求められてい
るということのあらわれであると重く受
けとめています。こうした熱心な受講者
の皆さんの後押しを受けて、私たち聖典
編纂部門の研究員は、聖典の編纂とその
普及に、より一層、真摯しんしに取り組まなけ
ればならないという思いを新たにしてい
るところです。

そして、一人でも多くの方々に、浄土
真宗の教えや歴史を学んでいただける場
を設けることこそ、今、私たちの教団に、



今年の「講座」告知案内

①——聖人の喜びの詩
——「正信偈」を読む前編
②——法蔵菩薩

シリーズを振り返って

求められているということなのでしょう。

「初めて学ぶへ浄土真宗の聖典」講座シリーズのうち、シリーズ1(全二回)

の講座が開講され、第一回(二〇一〇年十一月二十七日)と第二回(同年十二月十八日)は、それぞれ、午前の部では、「浄土真宗のいろは」「浄土真宗聖典いろは」と題して講義が開かれ、午後の部

では、「親鸞聖人と本願寺の歴史」「本願寺の両堂と書院」と題して講義が開かれました。また、第二回は、午後の講義に引き続き、実際に、本願寺の両堂(阿弥陀堂と御影堂)や書院を、解説を聞きながら拝観するというかたちで行われました。

そして、本年は、シリーズ2(全三回)とシリーズ3(全三回)の全六回の講座が予定されていますが、このうち、シリーズ2(第一回四月二十三日、第二回六月四日、第三回六月二十五日)が開催され、

午前の部では、新たに、はじめて『註釈版聖典』をご覧になる方のために、『註釈版聖典』で調べてみよう」という講義が加わり、続いて、「正信偈を読む前編

薩と阿弥陀仏」「正信偈を読む前編③——お釈迦の本懐——」と題して講義が開かれました。また、午後の部では、「御伝鈔のころ前編①——親鸞聖人の家族——」「御伝鈔のころ前編②——得度と六角堂参籠——」「御伝鈔のころ前編③——法然聖人とともに——」と題して講義が開かれました。

「はじめの一步」に相応しい講義のあり方

午前の講義の様子ですが、「註釈版聖典」で調べてみよう」という講義では、普段から聞き親しんでおられる仏教や真宗の用語のひとつを取りあげ、「註釈版聖典」の索引や巻末註その他の語註を使って、その語のもつ意味を、汲み取っていただけるよう、楽しく学んでまいります。

なかには、「よく知っている言葉なのに、こんなに深い意味があったのか」というふうにおっしゃる方もあり、単に、

『註釈版聖典』で調べるといふことに止まることなく、こうしたことを通して、より深い理解の一助となるよう心がけています。

次に、「正信偈を読む」講義では、まず、「正信念仏偈」の書き下し文を、受講生の方々と一緒に音読して、直にご文に触れていただくというところから始まります。「それでは、一緒に『註釈版聖典』のご文を拝読しましょう」とお声がけするやいなや、受講生の方々の大きな声に会場が包まれます。続いて、該当する箇所『現代語版聖典』を朗読し、その意味をうかがっていきます。そして、教義的に特に説明を要するところに焦点をあてて、できるだけ専門用語を用いずに、例えば話などを通して、親鸞聖人のおこころをうかがうというかたちで進めています。

また、午後の講義の様子ですが、親鸞聖人のご生涯を「ご絵伝」を中心にして、プロジェクトターなどの視聴覚機材を用いて、物語を紐解くようにご覧いただいで

います。

「ご絵伝」は、普段、お寺の余間などに、報恩講の時期に限って出されるものですから、描かれている内容を詳しく拝見する機会に恵まれないと思います。そこで、私たちは、「ご絵伝」のすべてを撮影し、一段一段の内容をつぶさに見ていただけるよう拡大しました。そして、描かれている情景や人物について詳しく解説をしながら、その歴史と教えについて「見て、聞いて、学ぶ」というかたちで進めています。

今秋のシリーズ

本年の秋に予定されているシリーズ3

(第一回十月二十二日、第二回十一月二十六日、第三回十二月十七日)は、午前の部では、「註釈版聖典」で調べてみようの講義に続いて、「正信偈を読む後編①

——七高僧のこころ——」「正信偈を読む

後編②——曇鸞大師のこころ——」「正信

偈を読む後編③——善導大師・法然聖人

のこころ——」と題して講義が開かれます。そして、午後の部では、「御伝鈔のこころ後編①——承元の法難について——」「御伝鈔のこころ後編②——関東時代の聖人——」「御伝鈔のこころ後編③——晩年の聖人像——」と題して講義が開かれます。

このうち、「正信偈を読む後編」では、七高僧にゆかりのある遺跡や聖跡、修学を積まれた寺院やその風景を視覚的にご覧いただきながら、それぞれの時代に、どのようにして過ごされたのかを、伝記や史料を通して紹介するとともに、教義的に大切なことについて、具体的に学んでいただけるように準備しています。

また、「御伝鈔のこころ後編」では、親鸞聖人の後半生を、これまでのシリーズのように、「ご絵伝」の一段一段の内容をつぶさに見ていただいて、その歴史と教えについて「見て、聞いて、学ぶ」というかたちで進めてまいります。



「初めて学ぶ“浄土真宗の聖典”講座」(2011年6月4日、安穩殿)

現代、教団に求められているもの

私たちは、地球上で最も優れた生物で

あるのかもしれませんが。また、あらゆる問題を解決し克服していける知恵をそなえているのかもしれませんが。しかし、そうした思いが強ければ強いほど、科学的に客観的にものごとを捉えようとしていく立場、自然から学ぼうとする立場から、逆に遠ざかって行くように思えてなりません。

そして、生とは何なのか、死とは何なのか、また、生きるこの意味は何なのか、人生の帰趨はどこにあるのか、という根本的な問題と真正面から向き合うということができない状況に自らを追いやっています。

こうした状況のなかで、真実の教えとは何か、私たちの拠りどころとなるものは何なのかということに改めてくれるもの、それは、「時代を超えて人びとに真実を知らしめ、苦悩からの救済を教示する」(『註釈版聖典』刊行にあたって)「浄土真宗」の教えにほかなりません。今こそ、私たちは宗祖親鸞聖人が明らかにお示しくださった阿弥陀仏のおこころを鏡として、「お聖教」を丁寧(ていねい)に拝読しなければなりません。

(聖典編纂部門常任研究員 佐々木義英)